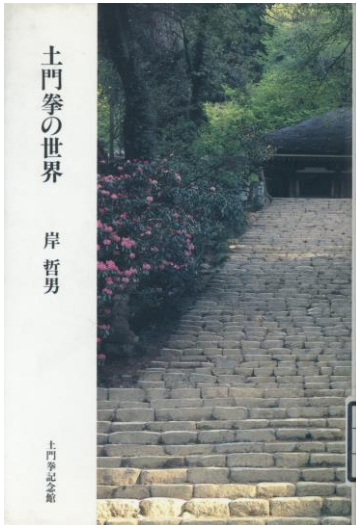


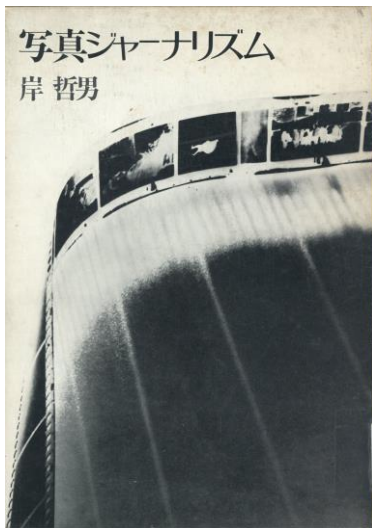
日本カメラ博物館 JCIH ライブラリー
学芸員 宮崎真二

岸哲男 (1909-2002) は、1932 年に二松學舎専門学校 (現：二松學舎大学) を卒業後、1937 年に毎日新聞社に入り、北京特派員、古美術担当記者などを経て、出版局図書編集部長として濱谷浩『雪国』(1956 年) の刊行に携わりました。1958 年 2 月号から『カメラ毎日』の編集長に就任し、1963 年 8 月号まで担当します。また、同年からは毎日新聞社百周年記念出版として企画された『国宝』の刊行委員会事務局長をつとめました。

1966 年に毎日新聞社を退職したのちは、20 年近くにわたり二松學舎大学文学部教授、講師をつとめながら飛鳥時代の歴史・文学研究を行い、『飛鳥古京 万葉のふるさと』(写真評論社・1970 年)、『萬葉山河』(集英社・1976 年)、『万葉山河紀行』(三彩社・1988 年)、『万葉集東歌紀行』(三彩社・1990 年)、『近江の万葉散歩』(東方出版・1997 年) などの関連著作があります。



『土門拳の世界』



『写真ジャーナリズム』

『カメラ毎日』編集長時代の仕事として特筆されるものに、1959 年 1 月号から 12 月号まで連載した土門拳の「古寺巡礼」があります。連載開始にあたり岸は、当初社会問題をテーマとした「土門拳の怒り」という企画を提案しましたが、土門の強い希望により古寺めぐりという内容にまとまります。連載終了後の 1963 年、美術出版社から『古寺巡礼』第一集が発行されました。土門は「はじめは『カメラ毎日』に連載したものに若干補充撮影して一冊にまとめるくらいの軽い気持で出発した」(あとがき)と語っていましたが、実際には殆どの作品を再撮影しています。以降 1975 年に第五集で完結するまで、土門のライフワークともいべきテーマになりました。また、岸はこの連載を通して土門を理解し、同い年ということも相まって深い友人となり、作品集に解説、評論を多数寄稿して、『土門拳の世界』(土門拳記念館・1985 年)などにまとめています。

このほか写真関係の著書として、『写真ジャーナリズム』(ダヴィッド社・1969 年)、『戦後写真史 解説・年表』(同・1974 年)を上梓しています。『写真ジャーナリズム』は長年出版編集業務に携わってきた経験を基にした解説書として、『ライフ』の誕生と発展、海外写真雑誌の概要紹介、日本を取材した外国写真家の印象など、欧米との比較交流を通して日本の写真を見るように意図しています。また「写真印刷の諸問題」という章を設け、写真家・編集者が知っておくべきとする印刷技術の解説に重きを置いているのが特徴です。1974 年には『ライフ』『ルック』の廃刊、印刷技術の発展など大きな訂正を要する項目が出てきたことにより、改訂増補を行っています。刊行からわずか 5 年で内容が大きく変化したことについて、岸は「社会と密接してともに推移してゆく写真ジャーナリズムというもののがたなのであろう」と巻末で述べています。